

人見竹洞と東皐心越：竹洞伝の一齣

大庭，卓也
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/9411>

出版情報：語文研究. 82, pp.25-37, 1996-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

人見竹洞と東臯心越

— 竹洞伝の一齣 —

大庭卓也

(一)

林羅山、鷲峰に師事して学業を修めてきた人見竹洞は、その好學ぶりが認められ、寛文元年閏八月、当時二十五歳、元老執政の同席するなか、林鷲峰のもとに儒官となることを命ぜられた。

人見家は、竹洞の祖父に当たる友徳の代から医学を生業とするようになった、医者を多く輩出する家系であり、竹洞の父玄徳も夙に幼科医として名を馳せ、四代將軍家綱の侍医を勤める大医であった。そのような家系に育った竹洞もまた本業を医道に置いていたのであるが、水戸藩儒の職にあり、羅山門の最年長と思しき叔父人見卜幽軒の誘掖するところが大きかったのだらうか、医学を学ぶ傍ら林門での学業を怠ることはなかった。そして万治元年四月には京に遊学すること約半年、禁裏の侍医を勤める叔父人見道伯に就いて本格的に医学を身に付けており、ようやく医者として一人立ちしようとしていた頃に儒官として拔擢されたのである。

竹洞の事績の第一に挙ぐべき『統本朝通鑑』の編纂に携わるよう

命が下ったのは、その三年後の寛文四年十月のことである。時既に林読耕翁は世に無く、また編纂のさなかの寛文六年には鷲峰の長男林梅洞が二十四歳の若さで天逝しており、本来なら最も頼みとすべき片腕を亡くした鷲峰の竹洞に向ける期待は、いや増しに高まっていたように見受けられる。竹洞もまた、そうした期待に応うべく、門人の筆頭に立って史書編纂に従事していたことは、編纂時の鷲峰の日記である『国史館日録』に徴して明らかである。

約七ヶ年に亘る『統本朝通鑑』の編纂を終え、その功績が認められるようになった延宝以降、竹洞は公務に明け暮れる日々を送り、儒官として最も華々しい時期を迎えることとなる。幕府儒官として確乎たる地位を得るに至るのは凡そこの時期に見定め得ると考える所以である。現に竹洞の経歴に言及する際、諸書が一樣に引く伝記資料として人見桃原撰「竹洞先生略譜」があるが、そこに竹洞を顕彰するべく書き連ねられた事績が主として延宝以降のことに属するのは、そのことを示唆するものであろう。いま、桃原の記述に補足して『統本朝通鑑』編纂から天和期にかけての儒官としての主な事績を略年譜の形式で列挙すれば凡そ次のようになり、鷲峰没後の林

門にあって、謂わば次代当主鳳岡の補佐役を勤めた竹洞像を見て取ることができらるであらう。

○寛文四年 十月 『統本朝通鑑』編纂に従事するよう命ぜらる。

○延宝八年 五月 徳川家綱の葬儀の記録を命ぜらる。

○同 八月 林鳳岡とともに紅葉山文庫の整理、目録作成を命ぜらる。

○天和二年 八月〜九月 朝鮮通信使の応接にあたる。

○天和三年 七月 鳳岡とともに武家諸法度の改訂に携わる。

○同 三年 十一月 鳳岡、木下順庵らとともに『武徳大成記』の編纂を命ぜらる。

かかる儒官としての地位の確立に伴い、竹洞の文事に接する人々は漸次に多くなつたと見える。竹洞の詩集としては文も併せて『竹洞先生詩文集』『竹洞人見先生後集』（以下、各々『詩文集』『後集』と略称す）の二書が伝えられ、その編集事情から主として寛文以降の詩文を概観できるものであるが、これら夥しい数にのぼる作品群を繙けば、肥前鹿島藩主鍋島直條、豊後日出藩主木下俊長、備中足守藩主木下公定、備中成羽藩主山崎義方など、特に竹洞に親炙した諸大名との交流が密になってゆくのも、まさに延宝以降のことである。最晩年の編集に係ると思しき自撰詩文集『葛東台葉録』の小引に

葛民子（註・竹洞の号）行ヒテ余力アレバ則チ、葛東ノ水竹深
処ニ遊ブ。坐スレバ則チ、書ヲ読ミ、琴ヲ撫デ、筆ヲ弄シ、香

ヲ焚キ、几ニ憑リ、茶ヲ烹ル。歩ケバ則チ、岡ニ登リ、流ニ臨
ミ、封ニ倚リ、竹ニ入り、荏ヲ裁テ、蔬ヲ摘ム。其ノ友ハ則チ、
清風有リ、山鳥有リ、野蟲有リ。逍遙トシテ楽シム。而シテ自
カラ謂フ、無懷氏ノ民カ、葛天氏ノ民カト。果シテ夫レ葛東大
平ノ民ナリ。（後略。原漢文、以下同）

と自ら謳歌する、葛東牛島に構えた水竹深処なる別墅で営まれていた雅交も、ようやく多彩な諸相を呈するに至り、その様は竹洞を中心として一つの交流圏が形成されていったかと思われるほどである。⁶⁰ また竹洞は水戸藩に招請された朱舜水、東臯心越などの来朝明人と盛んな交渉を遂げたことでも知られる。主として黄檗の渡来僧によって移入され、天和頃までには定着を果した明末清初の中国文化の影響を、この期の文壇の特性として認めることは周知の事実であるが、竹洞もまたそうした文化流入に敏感に反応し、強い関心を示した人物の一人であった。

舜水との交渉の一端は、既に徳田武氏によって、舜水の梅洞碑銘執筆を巡って、鷲峰をはじめ林門の儒者と舜水との間に生じた確執をうまく調停した、謂わば双方の連絡役を務めた竹洞と言うかたちで提示されているが、心越との交渉は、このような広範な交遊を形成していた時期を背景に行なわれていたことから、その様相もはるか多岐に亘っているようである。にもかかわらず両者の交渉は、杉村英治氏の心越伝記研究の中で心越側からの視点に立って断片的に扱われるにとどまり、未だ解明さるべき点が猶お存しているように思われる。そこで小論では、心越との交渉を軸として、そこに繰り広げられていた諸大名との雅交の様相の一端を提示することにより、

多岐に亘る竹洞後半生の文事を窺う料とするとともに、近世初頭における明末清初の文化流入の具体的状況を改めて確認するものである。

(二)

心越は光圀の招請により、天和元年七月に江戸に來り、翌天和三年四月、公許を得て水戸に移るまでの間、江戸水戸藩中屋敷に仮寓する。『詩文集』には、この間の心越との交渉を示す幾篇かの詩文が見られるが、それらの内、卷之二所収の心越の五言古詩に次韻した際の序文が注目される。この次韻詩は、既に杉村英治氏がその存在を紹介された、天和二年から三年にかけての竹洞自筆と思しき詩稿『鶴山詩草』の冒頭にも見えており、天和二年六月九日の作であることが明かなものである。今、『鶴山詩草』に拠って序文とともに次韻詩を掲出することとする。

孟夏初八日、聞心越禪師彈琴。謝以鄙詩。師賜和且別示古風一章。偶有官事。擾阻月。頃日欲往訪其草堂而未果矣。故和前韻二章、以呈之。

孟夏初八日、心越禪師ノ琴ヲ彈ズルヲ聞ク。謝スルニ鄙詩ヲ以テス。師和ヲ賜ヒテ且ツ別ニ古風一章ヲ示ス。偶タマ官事有リ。擾トシテ月ヲ阻ツ。頃日其ノ草堂ヲ往訪セント欲スレドモ未ダ果サズ。故ニ前韻ニ和スルノ二章、以テ之ヲ呈ス。

右其一

東方君子国	東方 君子ノ国
上世曾有琴	上世 曾テ琴有リシモ
久絕中華信	久シク絶フ 中華ノ信
無嗣大雅音	嗣 無シ 大雅ノ音
越師來万里	越師 万里ヲ來リ
更伝山水心	更ニ伝フ山水ノ心
初疑鳴鳳下	初メ疑フ 鳴鳳ノ下ルカト
復思潜龍吟	復タ思フ 潜龍ノ吟ズルカト
洋々熙春曲	洋々タル熙春曲
雨麗松竹陰	雨ニ麗シ 松竹ノ陰
盈耳自忘形	耳ニ盈チテ自ラ形ヲ忘レ
不覺清夜深	覺エズ 清夜ノ深キヲ
熙春太平世	熙春 太平ノ世
新調入素琴	新調 素琴ニ入ル
便是日東操	便チ是レ 日東ノ操
写成中国音	写シ成ス 中国ノ音
心高遇斯境	心高ウシテ斯ノ境ニ遇ヒ
境閑会斯心	境閑カニシテ斯ノ心ヲ会ス
泛如空谷蛩	泛スレバ空谷ノ蛩ノゴトク
按似飛泉吟	按ズレバ飛泉ノ吟ニ似タリ
莫教俗客聽	俗客ヲシテ聽カシムル莫レ
何又訪山陰	何カ又山陰ヲ訪ハン

請師精妙曲 師ニ請フ 精妙ノ曲
授我指趣深 我ニ授ケヨ 指趣ノ深キヲ

右其二 壬戌六月九日

詩序に拠れば、竹洞はこの年の四月八日に心越の許で琴の演奏を聴いて、心越から「古風一章」を示された。以来、官事に忙殺されてその草堂を訪れることができず、前韻に廣いで贈呈したが、この兩篇の五言古詩であると言う。即ち、この次韻詩は序文に言うごとく、四月八日に竹洞が心越のもとを訪れていたことを確認できる処に意義がある。と言うのも現時点で見得た資料の内、竹洞と心越との交渉は、この天和二年四月八日を以て最も早いものとするからである。第一首目中に「初メ疑フ 鳴鳳ノ下ルカトノ復タ思フ 潜龍ノ吟ズルカト」(第八・九句)、「耳ニ盈チテ自ラ形ヲ忘レノ覺エズ 清夜ノ深キヲ」(第十一・十三句)と詠じるあたり、琴の演奏を聴いて二ヶ月余、未だ冷めやらぬ竹洞の興奮が何処となく感得されるのであるが、その理由も『詩文集』巻之十一所収の心越宛書牘「与東臯師書」に照らせば、容易に了解されるであろう。

この書牘は、末尾に「季夏十有一日」との日付を有するのみで、具体的年記を欠いており、近時、心越および心越関係の詩文を網羅的に集めて刊行された『旅日高僧東臯心越詩文集』¹⁰⁾にも、この書牘を年時不詳のものとして採録しているが、前引の次韻詩を同封して心越の許に送られたと考えてまづ誤りのないものである。そのことは、この書牘が天和二年十二月に書かれたことが明らかなる「寄東臯書」と隣接して配列されていることから、天和二年のその日に書か

れた可能性が高く、また前引の次韻詩と近接した日付を有することからも言えるのであるが、それ以上に、本書牘の冒頭に、

契瀾 月ヲ逾ユ。七箇 平安ナリヤ否ヤ。頃日 官閣多事紛凡。
過日 狎座ヲ問フコト能ハズ。往ニ示ス所ノ古風一章、拙和ヲ奉
ゼント欲スレドモ、未ダ果サズ。偶タマ閑暇ヲ得、即チ兩篇ヲ
書シテ呈ス。郢正惟ダ希フノミ。

と、前引の詩序に言う、心越から古詩一篇を示されたこと、官事に多忙で心越のもとをしばらく訪問できなかったこと、心越の古詩に対する次韻詩一篇を贈呈すること、等の内容は各々書牘中の「往所示古風一章」、「契瀾逾月」、「頃日官閣多事紛凡」、「書兩篇以呈」等の語に照応していることから明らかである。従って書牘中に言う「兩篇」の「拙和」とは前引の次韻詩を指すものであり、本書牘の年時を天和二年六月十一日と見定めて太過ないであろう。よって、しばらく「与東臯師書」によって前掲五言古詩を賦した更に詳しい経緯を窺ってみる。書牘の後続箇所は次のごとくである。

我国上古、弹琴ノ復ナルコト有リテ響ヲ継グ者無シ。故ニ志有ル者 其ノ趣ヲ知ルコト能ハズ。師ノ葦航ヲ我が東方ニ停ムルヤ、初メテ之ヲ知ルコトヲ得。僕 前日謂フ所ノ此ノ熙春操ハ我国琴操ノ権輿ナルカ。僕 琴ノ趣ヲ知ラント欲シテ、年既ニ久シ。或ハ琴譜ヲ考ヘ、或ハ琴律ヲ求メ、未ダ其ノ一二ヲモ得ズ。今 師ノ弾ズル所ヲ聞キ、略ボ其ノ趣ヲ知ルコトヲ得。

(後略)

これに拠れば、竹洞は長年の間、日本に絶えて久しい琴曲の興趣を知りたく思っていたが、心越の弾するところを聞いて、初めてそれを知り得たのであった。前引の次韻詩の序文から、それは四月八日のことであり、また詩中に「洋々タル熙春曲」(第一首、第九句)、
「熙春 太平ノ世ノ新調 素琴ニ入ル」(第二首、第一・二句)と詠じているから、その時聴いた曲は「熙春曲」であつたらう。「熙春曲」は、心越が来府する前年の延宝八年に作曲した琴曲である。竹洞は初めて聴く七絃琴の音によほど感動を覚えたらしく、早速この書牘の末尾に「且ツ、前日今井氏ヲ介シテ熙春操ノ譜ヲ請フ。伏シテ乞フ、跣坐ノ餘間枉ゲテ手筆ヲ勞センコトヲ。」と、「熙春曲」の楽譜の写しをくれるよう、今井弘済を通して依頼したことを報じている。

心越の来府以前、竹洞は朱舜水と盛んな交際を展開していたのであるが、林鷺峰が『国史館日録』寛文五年九月七日の条に「友元甚ダ華風ヲ慕ヒ、屢シバ(舜水を)招キ、屢シバ逢ヒ、相睦ブコト故人ノ如シ。」と「言ふごとく、竹洞は舜水との交際を通して中華の文物に接することにも亦々としていた。心越との交流に関しても事情は同様と言つてよく、竹洞の最大の関心事は中華の文物に触れること、わけても七絃琴の奏法を会得することにあつた、と考えてよいであらう。竹洞の心越宛の書牘に「往ニ瑤報ヲ承ル。辱クモ東渡述志ノ古風一章 及ビ春従上来ノ新操一篇ヲ惠マル。」(『詩文集』卷十一所収「寄明僧心越書」・天和三年閏五月二十二日)、「且ツ往ニ請フ所ノ問 一々盛教ヲ得 鷗鷺忘機語段及ビ調絃入弄 一冊子ト為シテ之ヲ賜フ。固ニ是レ、琴壇ノ一宝函ナリ。」(同「寄明僧心越書」)、「且ツ、二譜ノ恵ヲ辱ウス。多ク幸々。」(『東臯全集』

卷下所収第十二書牘・天和三年九月十九日)、「前時、恵ミ借ス所ノ小譜一卷、平沙落雁譜一篇、即チ完璧ス。僕 写ス所ノ二卷モ亦大同ジク之ヲ送り奉ゼン。」(『詩文集』卷十一所収「与東臯書」・貞享二年八月二十七日)と、熙春曲の譜をはじめとして次々に心越から新たな琴譜を受け取っていたことを窺える言が散見するのは、そのことを雄弁に語るものである。とすれば、七絃琴の興趣を初めて知り得た喜びを綿々と説く前引の五言古詩と本書牘とは、心越との交流が始まった比較的初期の段階で草されたもの、即ち心越との交流が天和二年四月頃から漸く本格的に展開されるようになったことを示すもの、と考えられるのである。

かくして、心越が示寂する元禄八年まで延々と続く二人の交遊は始まったのであるが、次に竹洞が心越と接触を持ち得た事情を瞥見しておきたい。天和二年から三年の間に集中して竹洞の心越宛書牘には、しばしば水戸藩儒生今井弘済の名が見られることは注目すべきであらう。

○且ツ前日、今井氏ヲ介シテ熙春操ノ譜ヲ請フ。

○『詩文集』卷十一所収「与東臯師書」・天和二年六月十一日
○前日、借ルヲ許ス所ノ三教図、手写半卷ニ及ブ。(中略) 卷ヲ終ルノ後、今井氏ニ附シテ以テ還スベシ。

(同「寄東臯書」・天和二年十二月三日)

○今井氏府ニ帰ス。七茵ノ平安ヲ承リテ雀躍シテ已マズ。

(『東臯全集』卷下所収「呈心越禅师」・天和三年)

今井弘済は、字将興、号魯齋。小宮山楓軒「著旧得聞」に、十四歳

にして朱舜水に従い学問を修めたことを伝える。特に華音に通じ、その知識は後に雨森芳洲をして「此レ乃チ唐人ヲ学ブ中ノ傑然タル者ナリ」(『橘窓茶話』巻下)と言わしめたほどである。そうした語学力を有していたこともあってか、心越を招請する際には光圀の命を承けて長崎に赴いて直接交渉に当たり、来府後も謂わば心越付きの世話役として、その任に当たった人物である。

かつて舜水との交渉が始まった当初、これも舜水付きの儒生で竹洞と親交のあった小宅生順に「暹日ノ間 先ツ足下ノ高斎ヲ訪ヒ、相共ニ舜水ノ月下ノ門ヲ敲カバ如何⁽⁴³⁾」と面会の便宜を計ってもらっていた処を見ると、天和二、三年の心越宛書牘の中に弘済の名が集中して見られることは、とりもなおさず心越との交渉が弘済を通して進められていたことを語るものと考えるのが自然である。また『詩文集』には、心越宛書牘以外に弘済との交渉を示すものは見い出せないが、竹洞が舜水の許にあれば足繁く訪問していたことを考え併せれば、二人の面識はその頃から始まるものと考えられるのも自然であろう。⁽⁴⁴⁾ いったい竹洞は、叔父に初代水戸藩儒人見卜幽軒を、また従兄に初代彰考館総裁の職にあった人見懋斎を血筋に持ち、人脈のうえからも水戸藩にきわめて近い立場にあったことは間違いない。現に心越の来府当初、すぐさま弘済のような人物に接触して心越と交渉するを得ていたことは、そのことを具体的に示唆するものであろう。

水戸藩関係者の詩文を慶安から元禄年間にかけて年次を追って採録した詞華集『文苑雜纂』には、水戸藩邸あるいは史局などで行われた詩会の記録が多く見られるが、それらを辿ってゆくと、水戸藩修史事業の体制がようやく本格化する延宝・天和期以降、当時盛ん

に行われていた光圀、水戸藩士を中心とする公私の芸遊に、鳳岡を始めとする林門の儒者たちのなかでも特に竹洞が積極的に関わっていたことが知られる。その様は恰も驚峰没後の林門にあって竹洞が水戸家との交際を一手に引き受けていたかのような感を強く受ける。これまでに見てきたような心越との深い交誼を結び得たのは、まさに林門にあってそうした立場にあった竹洞のなせる業であったと言えるのである。

(三)

さて次に、竹洞と心越との交流を以上のように見据えたいうえで、そこに往来する諸大名の動きに目を向けてみたい。心越が七絃琴の奏法を竹洞に伝えていた経緯は前節で検証したが、そのほか心越は書画、篆刻ともに堪能であった。特に篆刻の技法は、後に紀州藩士榊原篁洲に伝えられ、黄檗僧獨立とともに我が国における篆刻技法の開祖と評されるほどであり、⁽⁴⁵⁾ こうした消閑の余技に秀でたことに拠るものか、本場中国曹洞宗を伝える禅者としてよりも、寧ろ外来の文化の伝播者として周囲から期待されていた面が大きかったとする指摘もなされている。⁽⁴⁶⁾ また世道人心に益せずとして吟詩作賦を好まなかった舜水とは対照的に、広く文芸を嗜好したらしい心越は、詩は勿論のこと、思いのたけを一首の和歌に託するのに吝かではなかった。水戸藩儒中村願言が心越について「此人道氣少シ、関心派ニハ隠元来リ、曹洞ニハ心越一人、唐僧来ルユヘニ一宗ヨリ崇ケレハ、無是非和尚ニナル、御側ハナシノ衆ニモナラレソウナル様子ナリシナリ」(内閣文庫蔵『中村雜記』三⁽⁴⁷⁾)と月旦するようには、その

穩和な人柄も相俟って、心越のもとには諸大名が交遊を求めて参集し、心越もまた、そうした求めに積極的に応えた模様である。その際には竹洞が多く仲介として立ち、それは恰も、心越と接触を持つ一つの窓口となっていたかのような様相を呈している。このことは例えば、竹洞の心越宛書牘に

○前日 清話スルト半日。多謝ス。竹紙ハ則チ、是レ加藤遠江守（註・伊予大洲藩主加藤恒泰）ノ領スル所ノ伊豫大津ニ製スル所ナリ。今年新タニ成シ、未ダ多クハ之ヲ製サズ。遠州ノ守、老師ヲシテ之ヲ見セシメ、而シテ画幅ヲ請フ。

（『詩文集』巻十一所収「寄東臯心越書」）
○追啓、豫州太守藤兼軒（同前、加藤恒泰）賜城太守豊大年（豊後日出藩主木下俊長）各 其ノ任ニ帰セント欲ス。余ニ囑シテ一語ヲ伝へ、来期ヲ期シテ面会セント欲ス云々。
（『東臯全集』巻下所収第三書牘）

と見えることや、この他『詩文集』所収の数篇の文章から断片的に窺うことができるのであるが、それらは副次的資料によって現時点で裏付のとれないものであるから註として掲出するにとどめ、ここでは比較的資料に恵まれ、そのような交流の在り方をほぼ復元し得る鍋島直條の場合に就いて見てゆくこととしたい。

『鹿島年譜』（佐賀県立図書館鍋島文庫蔵）の記述に従えば、直條は寛文十一年九月、父直朝に従って初めて江戸に上っているが、翌寛文十二年正月の条には「公、尚舎忠房（松平忠房）ノ館ニ過リ、林学士（鳳岡）、野節（竹洞）、狛高庸ニ会ス。」とあるごとく、島

原藩主松平忠房の館において竹洞との出会いを果たしている。時に直條十七歳、竹洞三十六歳である。更に同年五月の条には「忠房ノ席上、絶句ヲ賦シテ林学士ニ呈ス。学士コレヲ和ス。自後林家ト交誼愈渥ク、唱和往復ス。野節又忘年ノ交ヲ為シ、誘導尤モ厚シ。故ニ公詩ヲ賦スル毎ニ其教ヲ受ズト云コトナシ。」と、直條が林門の儒者、わけても竹洞に親炙したことを言う。『詩文集』は寛文末年から延宝初年にかけての詩を大幅に欠くゆえ、この『鹿島年譜』の言を確認し得ないが、『鷲峰林学士詩集』巻九六に就けば、寛文十二年七月の作として「源尚舎席和呈藤直隆芳韻」と、直條の名が初めて見えて『鹿島年譜』の言うところと近い時期に鷲峰らとの交渉があったことが窺知される。尤も、鷲峰、鳳岡らの詩集に直條との詩の唱酬が目立って見られるようになるのは延宝二、三年以降のことであり、竹洞との場合も同様であったと考えられ、実に林門の儒者と親睦を深めるのは具体的に延宝に入ってからのことであろう。その交遊と文事の記録は、福岡市立博物館蔵する卷子に装幀された詩箋類、およびそれらを書写したものを多く含む祐徳稲荷中川文庫蔵する『楓園家塵』二百余巻として残されている。この時期の直條と竹洞との交誼を察するに足るものとして、やや長文に亘るが、延宝三年に直條が竹洞に呈したと思しき「憶島東普遊文呈竹洞君」の次のような下りを掲出しておこう。¹⁸⁾

野竹洞君ハ官医元徳公ノ長子ナリ。其ノ身ハ鴻術ノ家ニ生マルルト雖モ、歩ヲ学路ニ進メ、己ノ才ヲ以テ自ラ其ノ家ヲ起シテ医業ヲ抛テ以テ儒官ニ列ス。謂ヒツベシ、儒門ノ大祖ナリ。我往年 謁ヲ源尚舎忠房ノ第二執ル。爾レヨリ以来、清顔ニ侍ル

毎二教諭僊ムコト無ク、激励スルコト愈ヨ遅ク、懇トシテ芳
 意 謝シテ餘リ有り。(中略) 其ノ淡交莫逆 以テ焉ヲ思フベ
 シ。就中、去夏六月、雅君ノ招キニ応ジ、葛東ノ別業ニ遊ブ。
 狛氏(註・狛高庸)モ亦タ来会ス。談笑スルコト欣トシテ旦
 ヲリ夕ベニ至ル。或ハ翰墨ヲ談ジ、或ハ風景ヲ賞シ、或ハ和調
 ヲ詠ジ、或ハ唐詩ヲ賦シ、或ハ手ヲ携ヘテ園林ヲ散步シ、同ジ
 ク舟ニ乗り、川流ヲ追遊ス。君ハ以テ琴ヲ弾ジ、狛ハ以テ笙ヲ
 吹ク。余モ亦タ盃ヲ傾ケ微ニ酔ヒ揚々タリ。
 (後略)

直條と竹洞とを強く結びつけたのは、右の言辞から端的に窺える
 ように和歌、詩文をはじめとする文事の業であったことは勿論であ
 るが、中華の文物に並々ならぬ関心を抱くことにおいても二人の趣
 味は一致していた。天和二年の朝鮮通信使来朝の際、直條は竹洞を
 介して、通信使一行と詩文の応酬を果して自らの趣味的欲求を満足
 させていたし、また、長崎警備役という職責にあり、『楓園家塵』
 によって唐通事林道栄、黄壁僧木庵、獨立などの中国文人との交遊
 が確認される直條であつてみれば、中国に関する最新の情報を竹洞
 に提供していたことも十分に考えてよいであろう。まさに互いの交
 情を深める要因として、謂わば相い補うかたちで強められていた
 中華意識が大きく作用していたことは間違いない。

では、直條が心越に接近しようとするのは何時のことであつたら
 うか。『楓園家塵』巻二四八は、直條が天和元年から同二年に草し
 た詩文をほぼ成立順に収めた詩稿であるが、そこに次のような二首
 の七絶が見えている。²⁰⁾

猥綴絶句一篇附鶴山詞伯、
 猩心越禪師左右。為他目面
 猥ニ絶句一篇ヲ綴リ鶴山詞伯
 ニ附シテ心越禪師ノ左右ニ呈
 ス。他日面觀ノ媒ト為スト云
 フ。

大雅清音中国寶 大雅ノ清音 中国ノ寶
 相期萍水洗縹塵 相ヒ期ス 萍水縹塵ヲ洗フヲ
 丈夫応不遠千里 丈夫 応ニ千里ヲ遠シトセズ
 東海長風徳有隣 東海 長風 徳ニ隣有リ

聞禪師杭州人而能知西湖之
 景致。因又裁一絶 能ク西湖ノ景致ヲ知ルト。因
 テ一絶ヲ裁ツ。

随縁万里出杭州 随縁 万里 杭州ヲ出ツ
 海外爰停一葉舟 海外 爰ニ停ム一葉ノ舟
 麴院荷風湖面月 麴院荷風 湖面ノ月
 夢中猶有旧時遊 夢中 猶ホ有リ 旧時ノ遊ビ

この二首の七絶は、天和二年五月五日、鷲峰の三回忌に忍岡に詣で
 た折りの七絶「端午日文穆公大祥忌。詣忍岡拜神主。因綴一絶、捧
 影前。」の直後に配されており、五月中の作であろうと思われる。
 一首目には、心越が遥か中国から渡来して我国に七絃琴の音色を伝
 えたことを、また二首目には、心越が未だ夢みることもあるであろ
 う、西湖を詠じる。『詩文集』巻之八に目を移すと、配列から考え

て天和二年夏頃の作と思われる、心越の西湖十景詩に韻を賡いだ七絶十首が見える。竹洞は心越の草堂を訪れた談話のついでに西湖の景致を尋ねていたらしい。そこに付される序文の口吻から察するに、前節で検証した、竹洞が初めて心越の弾ずる七絃琴の演奏を聴いたと言う四月八日に程近いことだったのかも知れない。心越は詳細に西湖十景を語った後、自詠の十景詩を示した。薫誦すること再三、竹洞は未だ見ぬ西湖の景致に思いを馳せ、十首すべてに次韻して心越に呈したと言う。心越が七絃琴を能くすること併せて西湖の景致に通じていることは、竹洞の目によほど鮮烈な印象として映じたらしく、竹洞は、この年の八月、綱吉の襲職を祝賀するために来朝した朝鮮通信使の応接にあたってているが、通信使一行のなかでも特に親しんだ洪滄浪に早速心越のことを次のように紹介した。⁽²⁾

余曰ク、中国ノ僧心越ナル者 弊邦ニ投化シ、琴ヲ能クスルト太ダ妙ナリ。是レ西湖ノ僧ナリト謂フ。又タ西湖ハ是レ、天下ノ勝地、一タビ其ノ形勝ヲ聞カンコトヲ願フ。而ドモ無路キヲ恨ム。足下其レ、心越ナル者ヲ聞クヲ得ルコト有ルカ、ト。

又曰ク、西湖ノ景勝枚挙スベカラズ。或ハ筆語ヲ以テ、或ハ詠語ヲ以テ、稍ヤ其ノ地ノ勝レルヲ聞クコトヲ得。中国ニ遊ブカゴトシ。足下ト心越ヲ携ヘテ、琴ヲ西湖ノ上ニ鼓セザルヲ恨ム。

又曰ク、惟ダ希フ、此ノ僧 弊邦ニ来リテ熙春操ヲ作ル。他日 電覽ニ備フノミ。

竹洞の受けた心越の第一印象が、前引の七絶に見られる直條のそれと一致していることは、直條が竹洞から心越の話を聞いていたことを語るものであろう。例えば竹洞が初めて心越の七絃琴の演奏を聴いた四月八日から五月までの間の直條の詩稿を見ると、「雨中即事呈客（小字註）孟夏廿一日鶴山公來訪」と題する五言律詩があり、竹洞は四月二十一日に直條のもとを訪問していたことが解る。前引七絶の詩序に「為他日面觀之媒云。」とあるごとく、こうした折に、直條は心越に関する情報を竹洞から具に聞き出して、詩を贈呈する機会を窺っていたのである。

かくして、竹洞が心越と昵懇となるや、直條はいち早く心越に詩を贈呈して面識を請うていたのであるが、以降、直條と心越との交渉を示すものは、多くは見い出すことができない。三年後の貞享二年に詠じた詩を逐次書きついで稿本である『楓園家塵』巻一四二には次のような七絶が見え、竹洞を介して、これも西湖の勝景の一つである孤山の画幅を請うていたようである。その配列から考えて二月中旬のことであろう。

頃日、以鶴山人為价、請心 頃日、鶴山人ヲ以テ价ト為シ、
越禪師索孤山図。因賦一絶 心越禪師ニ請ヒ、孤山図ヲ索
奉呈之、聊見其志。 ム。因テ一絶ヲ賦シ之ヲ奉呈

シ、聊カ其ノ志ヲ見ハス。

天外孤山春色深 天外 孤山 春色深シ
梅辺知是寄清吟 梅辺 知ル是レ清吟ヲ寄スルヲ
黄昏水月伝神手 黄昏水月 神手ヲ伝フ

写出思郷万里心 写シ出ス 思郷 万里ノ心

貞享三年七月、心越の兄に当たたる蔣尚卿が舜水と同郷の儒者張斐とともに長崎に来航した。心越は光圀の配慮により長崎に向けて発ち、八月には尚卿との再会を果たして、翌貞享四年一月まで長崎に滞在する。『詩文集』巻之十一所収の竹洞の心越宛書牘「寄心越書」は、九月十九日の日付があり、書牘の文面から、この間に送られたものと見てよいと思うが、それに、

偶タマ鍋島備前侯ノ風信有り。以テ一語ヲ致ス。

とあるのに拠れば、直條は長崎滞在中の心越にも、竹洞を介して音信を絶やしていなかったことが知れる。但し、この書牘に相当するものは『楓園家塵』に見い出すことはできない。

明けて貞享四年には直條と心越との交渉を指摘し得る。即ち『楓園家塵』巻八六に見える「楽思園八景詩」がそれであり、直條はその一を心越に依頼していたようである。まづ、詩題および作者名のみを記せば、次のごとくである。

梅窓新鶯	整字林学士	／	桜場白雲	幻覚崇寛
松林啼鶉	鶴山野節	／	蓮溪晚風	東臯越杜多
秋洲吟蟲	順菴貞幹	／	桂院霽月	紫雲機
柳岸睡鳧	東臯岡泰	／	竹径曙雪	宝月頭陀

楽思園は直條が国元鹿島藤津郡に有した故園の名称である。『楓園

家塵』巻一三九には、この八景詩が手元に集まり、一卷に裝潢した時点、即ち貞享五年に自ら草した「楽思園八景詩跋」が見えているが、それには「余、去春（註・貞享四年）東都ニ在リ。整字林学士ト相ヒ議シ、園景八品ヲ掲ゲ、以テ題ヲ出ス。学士及ビ野鶴山、岡剛ニ請ヒ、之ヲ賦セシム。其ノ餘、儒生浮屠ヲシテ之ヲ分賦セシム。」とあり、貞享四年の春、鳳岡とともに議して楽思園の景致八品を掲出し、それを四詠ずつに折半し、儒員と僧門とをバランス良く配置したものであったことが解る。鳳岡をはじめとする林門の儒者たち、天和三年に幕府儒官となった木下順庵（順庵貞幹）、そして浅草文殊院の僧雲堂（宝月頭陀）など、謂わば、当時、直條が持ち得た第一級の雅友でもって「楽思園八景詩」を構成しようとする直條の意図が読み取れると言っても過言ではなからう。そうした一人として心越が選ばれたのである。

心越の八景詩が直條のもとに届けられたのは、依頼して間もない五月一日のことであった。八景詩とともに心越は自作の画幅を添えて贈ったようである。貞享四年の直條の漢文日記体の記行である『興来日記²⁴』の五月朔日の条には「東臯心越禪師、頃日請フ所ノ八景ノ一題ヲ詠ズ。且ツ、自画三幅ヲ惠マル。書ヲ以テ之ヲ謝ス。」と、書き留められている。そして、同日のこととして「整字吾ガ行ヲ祖シ、佳招有り。鶴山来会ス。余 留別ノ吟ヲ作り、『思量東海深千尺ノ不及離筵一日愁』ノ句有り。二公 和ヲ賜フ（後略）。」との一文もみえており、直條はこの年、官暇を賜わり、五月三日には肥前鹿島に向けて参勤交代の旅へ発っているが、それに先立って、この日、鳳岡の催した送別の宴席で竹洞等とともに詩の唱和をしていたのであった。おそらく、心越の八景詩および画幅は、この席に

おいて竹洞によって直條へ渡されたであろう。そして直條はその日の内に礼状をしたためて竹洞に託し、翌日には心越の許に届けられた。直條の書牘は『楓園家塵』巻一〇八に見える、「呈東阜心越和尚書」がそれであろう。

僕未ダ丈室ニ參ゼズシテ渴仰スルコト既ニ久シ。頃日、鶴山子ニ依テ八景ノ一題ヲ請フ。日ナラズシテ高吟即成ス。而シテ小園ノ光景ニ添フ。且ツ水墨三幅ノ嘉恵ヲ以テス。茲ノ色此ノ行感佩ニ堪ヘズ。往キテ之ヲ謝セント欲スレドモ、門禁有ルヲ聞ク。故ニ又使价ヲ馳スルコト能ハズ。況ヤ夫レ淑装 紛々トシテ謝帖モ亦タ滯ル。多罪多罪。茲ニ鶴山子ニ附シテ、聊カ一語ヲ奉ル。方今、万里ノ行、重ネテ委曲ヲ致スノミ。艸々。不乙。

直條が竹洞を介して、心越に面識を請うていた天和二年夏以来、既に四年もの歳月が経っているにもかかわらず、冒頭に「僕未ダ丈室ニ參ゼズシテ渴仰スルコト既ニ久シ」と、未だ心越のもとを訪れていないことを言うのは、逆の見方をすれば、そこから竹洞を通じてのみ心越との交流が可能になっていた事情を看取することができるであろう。

これまで、外来の文化の伝播者と目された心越の許には多くの儒者や大名が集まって交遊を求めたとされ、それら個々の事象が漫然と説かれることが多かったのであるが、その多くの場合には竹洞のような人物の介在があつて、はじめてそれが実現し得ていたことは改めて確認しておくべき事実であろう。これまで検討してきた「楓園家塵」の諸資料から、竹洞が林門のなかにあつて心越との交渉を

可能とする窓口としての役割を務め、そこに諸大名と心越との交遊が繰り広げられていた、かような交流の形態が窺えるのである。

* * *

以上、竹洞と心越との交遊を中心に、そこに繰り広げられていた周囲の動きを描出することに努めてきた。その膨大な詩文集から知れるごとく、竹洞は後半生において広範囲な交流を持ち得ていた人物であり、また他の林門の儒者と同様、当時の文壇において中心的立場にあつたのである。しかし、その交流の広範囲なるが故に闡明し得ない面も大きい。個々の具体的な事実として解明されなければならぬ点は猶お多く、総てこれからの課題としなければならないが、心越との交渉を取り上げることが、こうした多岐に亘る竹洞後半生の交流に幾許かの秩序を齎らす恰好の素材であると考えて小論を草した次第である。

註

- (1) 内閣文庫蔵「人見氏伝」(写)。
- (2) 国会図書館蔵「竹洞全集」末尾に採録。人見桃原は竹洞の長男。註一掲出の「人見氏伝」竹洞の項にも、これがそのまま転載される。
- (3) 「竹洞全集」は「竹洞先生詩文集」と「竹洞人見先生後集」とを合綴したもの。人見雪江撰「竹洞人見先生後集序」に「詩文若干、既罹災、大略亡矣。祖桃原先生取之門人知音者之家、以作竹洞集。猶未盡之。詩云、彼有遺棄。此有滯穗。考雪江先生、摺以作後集。」とある。これに拠れば、竹洞の詩文は罹災して半ば失われていたが、桃原が諸方から作品を収集して「竹洞先生詩文集」を編み、更に雪江がそれに漏れたものを「竹洞人見先生後集」としてまとめた

ことが解る。こうした事情に拠るものか、『後集』の一部を除き、両者ともに主として寛文以降の詩文を収める。

- (4) 『詩文集』巻之二十所収。「葛東題葉録」「題葉文篇」「題葉吟巻」「題葉隨筆」の四部から成る。「題葉吟巻」の冒頭に「葛民子有官暇則、到水竹深処。興來則、吟。吟則、題葉而捨之。童子收拾、貯於一籠。以暇日録焉。」とあり、延宝三年から元禄八年までの詩を順不同に見る。すれば、その編集は最晩年に係わるかと思われる。猶お引用は「人見竹洞詩文集」(平成三年五月・汲古書影印版)に拠り、句読点・ルビ等を適宜加えた。以下同。

- (5) 水竹深処に関しては、堀信夫「素堂と江戸の儒者」(井本農一博士古希記念「俳文芸の研究」昭和五十八年三月・角川書店)に少しく触れられる。筆者も、水竹深処を拠点とする竹洞の交流に就いては、目下検討中であり、他日、稿を草するつもりである。

- (6) 中野三敏「都市文化の爛熟」(岩波講座 日本通史14近世4)平成七年一月・岩波書店)

- (7) 「朱舜水の「勉亭林春信碑銘」一件——形式と情緒——」(和漢比較文学叢書17「江戸小説と漢文学」平成五年五月・汲古書院)。また同氏の「人見竹洞・朱舜水往復書牘年時考証」(明治大学教養論集一二五九号・平成五年三月)は「詩文集」巻十一所収の舜水宛書牘の年次を綿密に考証されたものである。

- (8) 『望郷の詩僧 東卓心越』(平成元年三月・三樹書房)

- (9) 「人見竹洞「鶴山詩草」と東卓心越」(伝記)第五輯・昭和五六年九月)。「鶴山詩草」は東京大学図書館蔵、写本一冊。外題無し。墨付二十四丁からなる小冊子で初丁右下に「野節ノ之印」(陽刻)あり。末尾に「冊係天和癸亥所録 距一百六十八年。其帰於武川禾亭。為余追記鶴山之蹟無疑也。／嘉永三年端午月三日。一斎坦題時齡七十九。」との佐藤一斎の識語を見る。

- (10) 陳智超編。民国一九九四年一月、中国社会科学出版社。

- (11) 「寄東卓書」は「与東卓師書」の直後に配される。本書牘は「詩草」

の方にも見えており、且つ末尾に「玄臘初三日」の年時を有している故、天和二年十二月三日に送られたことが明らかな書牘である。

- (12) 水戸祇園寺蔵する心越関係の資料の一部をまとめた浅野斧山編『東卓全集』(明治四十四年六月・一喝社)巻下にその案譜が見えるが、『文苑雜纂』(国文学研究資料館蔵紙焼写真本)に拠る。以下『文苑雜纂』を言う場合には、この紙焼本を指す。巻三十にはその歌詞のみが記録され、末尾に「時庚申小春曼陀羅閣中作」との小字註を付す。

- (13) 『詩文集』巻之十一所収「宅正順書」。

- (14) 『文苑雜纂』巻十五には「詩文集」未載の竹洞の舜水宛書牘「奉朱老先生書(小字註)三月廿七日」が収められる。『雜纂』巻十五は寛文八年の詩文を集めたものであるから、この書牘は寛文八年三月二十七日に書かれたものであることが解る。そこには舜水付の通訳として下川三省とともに弘濟(本文では「洪齋」に作る)の名が挙げられる。

- (15) 中井敬所「日本印人伝」(大正四年九月)。

- (16) 永井政之「東卓心越序説」(「禅宗の諸問題」昭和五十四年十二月・雄山閣)、同「東卓心越と日本の禅者達——独庵玄光の場合——」

- (17) 「印度学仏教学研究」二八一・昭和五十四年二月)

- (18) 倉員正江「翻刻「中村雜記」抄(三)」(近世文芸 研究と評論)第三七号・平成元年十一月)

- (19) 巻之十三所収「三潭印月記」、巻之十八所収「陳雲生初度賀詩巻跋」等。

- (20) 『楓園家塵』巻二一八「楓園集」所収。

- (21) 『楓園家塵』巻一〇八にも記載される。

- (22) 『後集』に附録として収める『韓使手口録』八月二十四日の条。

- (23) 『楓園家塵』巻一四六にも記載される。

- (24) 冒頭に「一別万里。未得潮信。葦航遠、至風帆元。恙否。想繁縵之後、邂逅尊兄、俱叙案事。」と、心越が尚郷と邂逅したことを言う。

- 『楓園家塵』巻一八六所収。

〔付記〕

小論を草するに当り、御教示頂きました井上敏幸先生、杉村英治氏に御礼申上ます。また資料閲覧を快諾下さった祐徳稲荷中川文庫に深謝の意を表します。